

ものづくりがもっと楽しくなる?! メーカーズムーブメント

岐阜県立森林文化アカデミー ● 和田 賢治

メーカーズムーブメントという言葉が最近耳にした方も多いのではないでしょうか？だれもがものづくりの主役になれる世の中が実現しようとしています。今回は、そのお話を。

2011年の夏、私はアメリカメイン州にあるHaystack Mountain School of Craftsというアートと工芸の学校のサマープログラムに参加しました。その学校では5月から9月までガラス、木工、絵画、テキスタイル、陶芸などさまざまな分野の2週間プログラムが提供され、講師は実際に活躍されている各分野のプロが世界中から招集されます。私は木工のコースに参加し、地元メイン州で活躍する木工家の指導の下、2週間で自分がデザインした椅子を制作しました。

ある日、ほかの受講生から面白いも

のがあるから見に行こうと誘われ、行つ

てみると、何やらハイテク機械がずらりと並び、そしておもしろい造形物や繊細な加工がされたペーパークラフトなどが部屋に所狭しと並んでいました。ウィーンウィーンと行ったり来たりを繰り返す樹脂のようなもので立体物を作り出す機械、大きな台の上に置かれた木の板にまばゆい光を当てて絵を描く機械。それが私の3Dプリンターとレーザーカッターの初めての出会いでした。

人間が生み出す芸術的なクラフトを学べるHaystackにあったそれらのハイテク機械。話を聞いてみると、マサチューセッツ工科大学(MIT)との提携で、同大が進めている3Dプリンターやレーザーカッター、NC工作機械などをそろえた市民工房(FabLab)が設置され、アートや工芸などの手仕事との融合を2002年から模索しているそうです。(Fab

は、「Fabrication」ものづくり」と

「Fabulous」愉快、素晴らしい」といった意味が込められており、このFabLabはグローバルなネットワークを形成しています。匠の技術だと鉋(かんな)や鑿(のみ)をつかった木工を学んできた私には、すぐにそのハイテク技術と木工などの仕事を結び付けることはできませんでしたが、同じ受講生の中には、テーブルの天板をレーザーカッターで彫刻したり、MDF(繊維板)をレーザーカッターで成形してオブジェを作ったりと、新しい技術をどんどん取り入れて制作していました。非常に興味深いものでしたが、私の中ではまだ表現の幅を広げるツールだという程度の印象でした。

しかし、アメリカの雑誌Wiredの元編集長であり、3D Robotics社のCEOであるクリス・アンダーソン氏は2012年に出版した「Makers-21世紀の産業

革命が始まる」の中で、ものづくりにおいて個へのパワーシフトが起こり、製造業の在り方ががらりと変わる、とメーカーズムーブメントがもたらす時代の変革を明言しています。これまで潤沢な資金と設備をもつ大きな企業が大量生産しなければいけなかったものでも、デジタル工作機械が一般に普及し、より気軽に、より簡単に、より安くさまざまなものが自分で作れてしまう世界がすでに実現しようとしている、としています。

今では、3Dプリンターもレーザーカッターも個人で買えるほど価格が下がってきています。中には10万円を切る3Dプリンターも登場してきました。ものづくりの幅はより広がり、よりオープンに個人が楽しめる時代になりつつあります。そして日本でもFabLabが各地にできてきました。カフェと併設し、より気軽にものづくりができる環境を提供しているところがあったり、木工や鉄工などの専門の機械とデジタル工作機械を揃えた貸し工房としてさまざまなものづくりを支援している場所もあったりします。岐阜にもIAMASがFabLabという工房を設立し、一般に開放しています。これからのものづくりの在り方として、森林文化アカデミーでもモノを製作する際に、利用させてもらいなからその可能性を探っています。